# 映画『夢みる小学校』の社会的反響が意味するもの

## ――南アルプス子どもの村の教育現場から

加藤　博

かとう　ひろし
1971年生まれ、岐阜出身
学校法人きのくに子どもの村学園
南アルプス子どもの村小中学校校長
大阪市立大学大学院修士課程終了
きのくに子どもの村学園に勤務して30年目
趣味は登山
山梨子ども白書編集委員
多様な学びプロジェクト講師

### はじめに

映画『夢みる小学校』は二〇二二年二月に公開され、今もなお全国各地で自主上映会が開催されている。この作品は文科省選定作品として評価され、第三二回日本映画批評家大賞のドキュメンタリー賞を受賞した。映画の中で、南アルプス子どもの村小中学校（山梨県南アルプス市）の学校生活が紹介されたことがきっかけで、いまも学校への問い合わせが相次いでいる。

映画批評家大賞選考委員はドキュメンタリー賞について、この映画が持つ独自性と革新性を高く評価している。

「ここにはなんと宿題もなければテストもない。先生さえいない。子どもたち自らが、生活そのものから題材をみつけ、主体的に学びを深める。そばを育てるところから始まり、麺を打ち、食べてみる。彼らの学びはそばの風土歴史、数学などにどんどん広がっていく。子どもには無限の可能性があると、改めて実感させる彼らの学びの風景。（……）」

「また大きく時代が変わろうとしている。今、教育の主体とはなにかの問いは決して看過できない。これは教育の現場のみならず、全世代が共有すべきものだと痛感させられる。未来はいまの子どもたちが創っていくのだから」（抜粋）

映画では、校則をすべてなくした世田谷区立桜丘中学校や、六〇年間、保護者に通知表を渡していない伊那市立伊那小学校が紹介される。映画を観た人々は「こんなに自由な学校が正規の学校として認可されていることに驚きを隠せなかった」、と口々に伝えている。

もちろん批判的な意見もある。本当に大丈夫なのかという不安の声や、この教育では、子どもが将来、必要なスキルや知識を十分に身につけられないのではないかという懸念をもつ人もいる。

だが少なくとも、この映画を観た人は、従来から学校にある枠組みにとらわれず、新しい教育アプローチを模索するきっかけを得るに違いない。そして教育は子どもたちの未来を形づくる重要な要素であり、常に問い続ける必要があると気づかされるだろう。『夢みる小学校』は単なる映画作品で終わるのではなく、社会的な議論や教育改革への着想を得られる作品として、いま注目されているのではないだろうか。

### ないものづくしの学校

学校法人きのくに子どもの村学園は、和歌山県橋本市において、一九九二年にスタートした。ニイルのサマーヒル・スクールの子どもによる自治をモデルに、デューイの経験主義の要素を複合した考えを基本理念としている。「まずは子どもを幸せにしよう。すべてはそのあとにつづく（ニイル）」を合言葉に、子どもの可能性を全面的に信頼し、教員は決して子どもを先導せず、愛をあたえ、まかせて待つことを大切にしている。その理念は、大正自由教育や戦後の経験主義教育の流れを受けて形成されている。

子どもの村のオルタナティブな点は、従来の学校からいろいろなものをなくした点にある。たとえば、

・チャイムがならない。
・テスト、宿題、通知表がない。
・競争をしたり、序列をつけたりしない。
・何年何組はなく、異年齢縦割り編成になっている。